

校長つうしん No.43



2018.3.8

鈴木 恵一



どこに価値を見出すか



平昌^{びよんちやん}冬季五輪で銅メダルに輝^{かがや}いたカーリング女子(ロコ・ソラーレ北見(LS北見))の選手たちが何気なく口にしていた言葉、「そだねー(そだね)」が脚光^{きゃっこう}を浴び、北海道独特のイントネーションが可愛い^{かわい}ということで、予想外の盛り上がりを見せ、それはそれで微笑ましい^{ほほえ}なと思いました。



もし、関西弁の「そやね」「せやな」だったらどうだったんだろう……と一人で勝手にいろんなことを想像しました。競技の本質とは異なる話題(ポジティブ & ネガティブ)でも盛り上がった五輪でしたが、肝心^{かんしん}の競技を通じて私たちは何を感じ、何を学ぶべきか、今回はそこについて触^ふれたいと思います。

国民は自国の選手がメダルを獲得するたびに歓喜^{かんき}し、表彰台^{ひょうしょうだい}に上がった選手を褒め称え、その後も幾多^{いくた}の感動秘話^{ひわ}が公開され、そのつど私たちは多くの感動をもらいました。フィギュアスケート男子の羽生結弦^{はにゅう ゆづる}選手に対して政府が国民栄誉賞^{えいよしょう}を授与^{じゅよ}することを検討すると報じられています。

世界の頂点^{ちやうてん}に立ったアスリート達が誉め称えられるのは当然ですし、私たちは彼らの努力(成功と失敗の積み重ね)から多くのことを学ぶことができます。では、メダルを取れなかった選手、予選で敗退した選手は褒め称えられない存在なのでしょうか。彼らの努力は負けたことによって意味がなくなるのでしょうか。



勝ち負けだけでいえば、出場選手の大半が負けているわけです。さらに掘り下げ^ほてみると、国

内の^{せんこうかい}選考会で敗退した選手がたくさんいます。すべての競技・種目を見渡したら、世界中が敗者だらけなわけです。勝者だって、永遠に勝者ではられません。負けてしまうと、何もかも水の^{あわ}泡になってしまうのか、これで人生が終わってしまうのか。人生とは常に勝つこと、チャレンジした以上は成功し続けなければいけないのか？

スポーツをスポーツとして^{かんせん}観戦するだけではなく、そう、囲碁・将棋の世界も、学問も文化も、芸術も、仕事も、そこに自分の人生を^{とうえい}投影して考えることによって、人としてどうあるべきかのヒントが見えてくるのです。

気持ちの切り替え

もう何度も書いてきたことですが、負けや失敗を恐れていると何もできません。何もしなければ成功もないし失敗ありません。何もしないことは、ある意味、

とても大きな失敗であり、もしかすると、とても大切なものを^{きかい}得る機会を失うことになるかもしれないのです。人の^{いとな}営みはすべてチャレンジであり、人類はそうして失敗の歴史を積み上げながら成功の歴史をつくりあげてきたのです。

大切なことは「**負け**」や「**失敗**」から**どう学ぶか**です。「挫折」したままで終わらせてはいけません。そこでは「弱い自分」「逃げている自分」も見えてきます。心をどう整理するか……

つい先日、夏目漱石の短編をパラパラと眺めていて、心にとまる一文に出会いました。自分なりに^{かいしゃく}解釈して自分の言葉で卒業式の式辞にも入れました。

「**前後を切断せよ、みだりに過去に執着するなかれ、将来に望を属するなかれ、満身の力を込めて現在に働け**」。(漱石がロンドン留学中に病気の友人・^{まさおか しき}正岡子規に宛てた日記形式の手紙を子規が短編集にした「倫敦消息(ろンドンしょうそく)」の一文)



私はこの言葉に^{せすし}背筋がしゃんとしました。失敗したり負けたりして、^{せつ}切なかつたり^{くや}悔しかつたり^は恥ずかしかつたり、どうしようもない思いを^{いだ}抱いた昨日に別れを告げよう。まだ来ない明日に^{おび}怯えるよりも、希望の明日を^{むか}迎えられるよう今この^{しゅんかん}瞬間を^{せい}精一杯生きよう。そう解釈しました。

